

あいおえびの歴史

車えび養殖発祥の地「秋穂」

車エビの研究者 藤永元作博士

山口県萩市江向出身。昭和8年に東京帝国大学卒業後、共同漁業(株)に入社、早稲水産研究所に勤務。天草、秋穂、台南(台湾)などに出張所を開設し、車エビの研究を行う。その後、車エビの養殖の企業化を行い、稚エビの大量生産、温室ハウスを使用した早期稚エビの生産、人工飼料等の技術が確立されました。



遊歩道から望む

車エビの 養殖場になった秋穂

車エビを卵から養殖することに成功した藤永元作博士。昭和11年より秋穂で研究実験を重ね、当時の秋穂漁業組合長をはじめとした地域の漁業関係者と協力し、車エビの生態を明らかにしました。昭和17年(研究生活6年目)に人工養殖ができるようになりましたが、その年の台風により堤防が決壊。調査研究資料は家もろとも流され、実験は頓挫しました。

全国塩田整備が行われた昭和35年(1960年)、藤永元作博士はこの秋穂の塩田跡地を利用し、車エビ養殖の企業化を計画。花香塩田跡地を養殖場として昭和38年4月20日に「瀬戸内海水産開発(株)」を発足。その年の12月には現在の山口県内海栽培漁業センターも発足させ、養殖や種苗の生産、飼料の培養等の実験が行われました。昭和41年からは、毎年秋穂湾・大海湾に車エビの稚魚を放流。昭和47年には造成した人工干潟にも放流を始めました。

こうした事業が功を奏し、車エビは秋穂において最も漁獲量の多い魚種となりました。以後、山口市秋穂は「車エビ養殖発祥の地」として広く知られることとなります。



当時の塩田の様子

車エビの畜養

山口県における畜養は、明治33年(1900年)に秋穂二島村の時繁時三郎氏が汐入りの小溝を利用して車エビの畜養に成功したのが始まりで、後に鹹水池を用いて事業が拡大されました。

山口市秋穂で本格的に車エビの養殖を始めたのは時繁菊治郎氏で、明治42年に養殖場を設けました。大正5年(1916年)に小川太作氏が養殖を始め、大正9年には秋穂村内の養殖場は8カ所となりました。

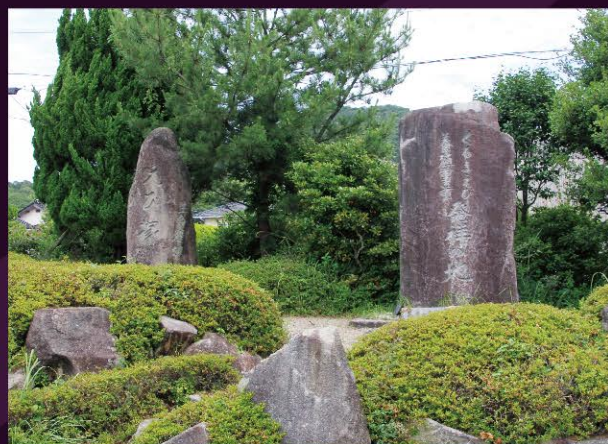
大正13年に山口県の水産試験場瀬戸内海分場が三田尻に開設。車エビ・アサリの養殖試験が行われ、育てる漁業への道を開きました。

出典

- ◆ 浅海利用水産増殖
著者 徳久三種・鴨脚七郎 水政会(昭和2年)
- ◆ ふるさと秋穂の郷土史と歴史
著者 田中穰 秋穂中央公民館(平成7年)

取材協力

旭水産(株) 代表取締役 八木政治



くるまエビ養殖事業発祥の地 石碑



漁師が車エビを捕獲してから
出荷するまで飼育する話は古くからあり、
山口市秋穂二島で明治33年(1900年)に
飼育に成功した資料が残っています。

車エビの養殖の発展は、山口県萩市出身の藤永元作博士による功績が大きく、養殖技術の研究を行い、拠点であった山口市秋穂には日本国内のみならず世界中から車エビの養殖技術を学ぶ人々が集まりました。

現在、世界中で車エビやブラックタイガー、バナメイエビなどの養殖が行われていますが、その技術の基礎は山口市秋穂で構築されたものです。そのため「秋穂」の地名はエビ養殖業界に広く知られています。

そのようなことから山口市秋穂には車エビ料理専門店があり、県内外から年間二十万人の観光客が訪れています。活きた車エビや車エビの加工品を扱う事業所もあり、日本全国のご家庭にお届けしています。

また、海水浴場に放った活きた車エビを手で捕まえるイベント「あいおえび祭り世界選手権大会」が山口観光コンベンション協会秋穂支部により毎年開催されており、山口県を代表するイベントになっています。